

お薬



<15>

よもやま話

徒然草の知恵

七百年ほど前の鎌倉時代に書かれた吉田兼好法師の「徒然草」は日本三大随筆の一つと言われています。長短242編ありますが、その中に薬をテーマにしたものが二編あります。第九十六段と第四百九十九段です。こんな内容です。

【第九十六段】

「めなもみといふ草あり。く

ちばみに整(さ)されたる人、
かの草を揉みて付けぬれば、
即ち癒ゆとなん。見知りて
置くべし」

「くちば

み」とい
うのはマ
ムシのこ
とで、こ
れに咬
(か)まれ
たら、め
なもみ(藪
煙草)の

葉を揉(も)んで貼ると即
効の毒消しになる、という
のです。これは止血、解毒、
腫れ物、打ち身薬として中

国から伝えられた藪煙草です。
【第四百九十九段】
「鹿茸(ろくじょう)を鼻に
当てて嗅ぐべからず。



小さき虫あ

りて、鼻よ
り入りて、
脳を食むと
言へり」

「鹿茸」と

いうのは、
牡鹿の角が
春に脱落し
た後に新生
する袋角を乾燥したもので、
漢方で増血、鎮痛、強精剤
として用います。
また「小さき虫」という

のはマダニと思われませんが、
鹿茸に巣食っていたものが
人に移って皮膚に食い込み、
運が悪いと今で言う重症熱
性血小板減少症候群(致死
性のウイルス感染症)を発
症したものと思われれます。
脳の解剖学的な認識が当時
既にあったことに驚かされ
ます。

ところで、第九十六段の
マムシや第四百九十九段に出
てくるマダニは当学区内に
も生息しますが、一斉清掃
やポラントィアの草刈り活
動で大幅に減少しています。
ありがたいことです。